

平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K22	氏名	佐藤 敦子
研究主題 —副主題—	小学校国語科における自己調整学習の授業実践		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	遠藤 真司
所属校	大田区立松仙小学校	校長	齊藤 純

キーワード：自己調整学習、学習方略、セルフモニタリング、自己評価表

1 研究主題設定の理由と目的

学校教育において、子供たちに各教科の特性に応じたものの見方や考え方、内容はもちろんのこと、生涯にわたって自ら学び考えていく力を身に付けさせることが必要であると考えている。しかし、ベネッセ教育総合研究所による「第5回学習基本調査」(2015)によると、「上手な勉強の仕方が分からない」と答えた小学校第5学年は約31%、中学第2学年では67%を占めている。また、これまでの経験の中で、国語科において子供たちは既習事項を活かして読もうとする意識を持っているのか、自力で読みを進める力を身に付けているのか、何より筆者自身がその力を育てる授業をしているのか、という問題意識を抱いてきた。子供たちが自律的に学習を進められるためには、「自己調整学習」のフレームから考える必要があると考える。自己調整学習(Self-regulated learning)とは、「学習者が〈動機付け〉〈学習方略〉〈メタ認知〉の三要素において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義されている。(Zimmerman, 1986) Zimmermanは自己調整学習の望ましい進み方を次の3段階にまとめている。「予見」の段階とは、目標を設定し、どのように学習を進めていくかの学習方略について考える下準備の段階である。「遂行コントロール」の段階とは、学習中に生じるプロセスであり、学習方略の遂行がうまくなされているか、順調に進んでいるかどうかをモニタリングしたりコントロールしたりする作業を行う段階である。「自己省察」の段階とは、遂行後、学習が目標に達成したか、またはどのくらい基準を満たしたかなどを自己評価し、なぜうまくいったのか、あるいはうまくいかなかったのかの原因を振り返る段階である。自己調整能力は、発達段階で自然に身に付くものではなく、教師側の意図的な介入と学習者による意識的な学習が必要とされている。(Chang 2005)。また、伊藤(2009)は、自己調整学習を促すのは、「自分のことを自分で振り返る」メタ認知の能力が高まってくる小学校高学年から中学校初期に始めるのが最も適切であろうと述べている。このことから、小学校高学年段階でメタ認知能力を促し、自己調整のできる学習者を育てることは、生涯学び続ける自立した学習者を育成することにつながるかと考える。そこで、国語科の「読むこと」「書くこと」の領域において、自己調整学習の理論をもとにした学習方略の使用とモニタリングに焦点化して実践を行うこととした。目的は次の二点である。

① 学習方略を明示して子供が意識的に活用する授業

を行い、セルフモニタリングを促す自己評価をすることで、自己調整のできる学習者を育成する。

② このような学習のプロセスを重ねることは、学力の定着にも効果がみられることを明らかにする。

2 研究の方法・内容

対象 実験群：東京都公立A小学校 第5学年W組(32名)、公立A小学校第5学年X組(31名) 筆者による授業

統制群：東京都公立A小学校第5学年Y組(32名)、公立A小学校第5学年Z組(32名) 学級担任による授業 指導書に準じた授業

時期 2016年10月18日～11月16日

使用する教材

「天気を予想する」武田康男(光村図書) 5時間

「グラフや表を用いて書こう」(光村図書) 6時間

検証方法 質問紙調査 臨床実習開始前(10月)と終了後(11月)に実施をした。全て4件法で行った。

① 国語科に関する意識調査

国語に関する学習意欲や自分の学習状況をメタ的に見ているかなどを調査するために作成した。主に説明的文章を読むこと、書くことについての質問を行った。

② 読解方略の使用に関する調査

犬塚(2002)を参考に、小学校高学年で身に付ける説明的文章に関する読解方略15項目を作成した。例えば「筆者の主張をとらえる」、「問いを探しながら読む」などである。子供には、「説明文を読むときに気を付けていること」として調査を行った。また、その他自分で読むときに気を付けていることがあれば書く欄を設けた。教材「天気を予想する」で多用されている非連続型テキストの読み方に関わる内容を入れた。

③ 作文方略の使用に関する調査

小学校学習指導要領解説国語編を参考に、小学校高学年で身に付ける説明的文章に関する作文方略10項目を作成した。例えば「自分の意見の根拠となる具体例を書く」「読み手が理解しやすい文章構成を考えて書く」などである。子供には、「意見文を書くときに気を付けていること」として調査を行った。また、その他自分で意見文を書くときに気を付けていることがあれば書く欄を設けた。

目的に迫るために以下の取組を行った。

① セルフモニタリングの説明

第2時にセルフモニタリングについて説明をした。

モニタリングをするテレビ番組を例に取り上げて説明したことで、モニタリングとはどのようなものなのかのイメージをもつことができた。次時以降も授業の開始時に自分の学習をモニタリングしよう、自分の学習のコーチになろう、などの声掛けを行った。

② 学習方略の明示

本実践では読むことと書くことの2領域について授業を行ったため単元に関わる読解方略と作文方略を明示し、授業中に活用することを促した。そしてその方略をどれくらい使うことができたかをセルフモニタリングしながら自己評価表でチェックした。

③ 読解方略の明示

第2時に「説明文の特徴を知ろう」という学習課題の授業を行った。説明文と物語文を比較した上で説明文とはどういう文をいうのか、文章構成には型があること（頭括型、尾括型、総括型、順序型）の指導をした。また、第4時から第7時の読み取ったことを友達に説明する活動では、「説明するコツ」として「一つは～」などの接続詞を使う、問いに対する答えを最初に言う、何を表す図表なのか述べる、見てほしいところは指で指すなどの方略（子供にはコツと表現）を最初に明示した。さらに、方略に気付くことのみで終わらないように活用しながら方略の獲得を目指した。

④ 作文方略の明示

説明文で使った読解方略を書く活動でも使えるような単元構成をデザインした。特に、非連続型テキストを用いて文章を書くことが初めてということと、本単元の重要な事項であることを考え、第9時では文章と非連続型テキストのどこが対応しているかを読み取る活動を繰り返し行った。読み取ったことは事実、そこから考えられることは意見とし、二つをセットにして意見文を書くことを方略の一つとした。また、文末表現の書き方で事実か意見かを区別することも指導した。書くことは個の活動になりがちだが、友達に非連続型テキストの説明をすることで今自分はどれくらいその非連続型テキストについて理解できているのかをモニタリングしたり、読むことと同様に自己評価表で方略をどれくらい使えたかをチェックしたりする項目を作成した。

⑤ 自己評価表でのモニタリング

毎時間の授業内容に合わせた「自己評価表」を作成し、授業の最後に振り返りをする時間をとった。本時に関わる学習方略の活用状況や自分の学習状況をモニタリングする質問項目を設け、3件法で評価するようにした。加えて、なんとなくできる、分かると思わないようにするために、今日の授業で大事だと思ったこと、今日の授業でまだよく分からないこと、うまくできなかったことを記述するようにした。

3 研究の結果

① 質問紙調査

国語科に関する意識、読解方略、作文方略に関する質問紙調査について、群ごと（実験群、統制群）の授

業前後の平均値を比較するために分散分析を行った。Table 1に各質問紙調査の平均値（標準偏差）及び分散分析の結果を示す。

② テスト成績

全国学力・学習状況調査の抜粋問題を用いたテスト成績について、群ごと（実験群、統制群）の授業前後の平均得点を比較するために分散分析を行った。Table 2に各質問紙調査の平均得点（標準偏差）及び分散分析の結果を示す。

4 研究の考察

質問紙調査の国語科に関する意識、読解方略、作文方略とテスト成績において有意な結果がみられたことから、子供たちに学習方略を明示し、学習方略をどれくらい使えたか、自分の学習状況や理解状況はどうだったかをモニタリングする授業は効果があったといえる。子供が書いた自己評価表の記述欄には、「毎時間振り返りをするので、自分は何が得意で苦手かが分かった」との言葉があった。これは自分の学習をメタ的に見ることができている記述である。また、学習方略を明示してから活動に入ったことによって、読解方略や作文方略の適切な使用を子供たちに促し、方略の獲得にもつなげることができた。2単元目の書く学習では「問い」を使うという方略を示さなかったが、読む学習で学んだ内容であったため、子供から「問いを使って書きたい」という言葉が聞かれ、実際に問いを用いながら意見文を書いた児童が数名おり学習の転移が見られた。意見文を書いた後には「先生自信作です」と言って持ってくる子がいたことは、認知面からのアプローチが自己有用感を高める可能性を示唆したものと考えられる。

5 今後の展望

先述の転移は読む学習直後の学習の転移であり、今後も転移が続くことを保証するものではない。また、自立した学習者を育てるという長期的視野で鑑みたとき、学習方略の明示と自己評価表を用いたセルフモニタリングだけでは十分ではないと考える。セルフモニタリングを自己省察段階のみで行うのではなく、遂行コントロールの段階でモニタリングをし、コントロールを図るように促していくことも必要であり、そこに教師がどう介入していくか検討の余地がある。また、今回は認知的側面である学習方略の使用とセルフモニタリングを促すことに焦点を当てたが、情意面が子供の理解を深化させたり持続させることもある。特に小学校の発達段階では「できる」「わかる」だけではなく、「やってみよう」「もっと知りたい」という学習者自身の欲求からくる動機付けは支柱となるだろう。認知面と情意面との関係の研究を深め、自立した学習者の育成につながるアプローチをしていきたい。